

複数話者のトークイベント構成の3事例とその司会法について

渡部 義弥*

概要

複数話者が同時に登壇するトークイベントは、音楽の合奏のように単独話者では出せない魅力を発揮できる可能性がある。そのさい、単独話者の講演に比べ、イベントの構成と司会法の自由度が格段に増え、その比重が大きくなるものになる。筆者は、ここ1年以内に行った直近の3回のトークイベントで、構成と司会法についての工夫をし、参加者に好評だったほか、ネット中継も行った2回での投票評価も高かった。本稿では、これら3回のトークイベントで試みた構成と司会法について、その要点を紹介する。

1. はじめに

一般に、講演会の成否は、講演テーマと講師の能力で決定する。講師が複数であっても、講演が連続する形式であればこれはほぼ同じである。

一方、構成や司会については、比重が少ない。講演会の構成は図1のように定型的であり、司会の自由度もさして高くないためである。



図1. 一般的な講演会の構成

司会がやや役割を發揮できるのは、質疑応答の時間である。この進行がよいと聴衆にとっての参加した価値を高めることができる。ただ、質疑応答の時間は、一般に講演会全体に対して短いので、これは限定的である。

また、講師の失言や、聴衆と講演内容の難易度や方向性のミスマッチなどがあった場合、司会がそれをフォローすることはありうるが、講演会全体をそれで立て直すのは至難である。

したがって、講演会の価値を決定的に決めるのは、講演テーマと講師の能力によることはゆるがない。講師の選定時点で、講演会の成否はほとんど決まってしまうのである。

一方、シンポジウムなど複数話者が同時に登壇するトークイベントは（以下トークイベント）、構成と司会の重要性が格段に増す。一方で、講師は必ずしも話し上手である必要はなく、話題提供できる中身を持っていればよい。図2はシンポジウムの、図3は座談会形式の構成の例である。いずれも、司会の関与の多さが一目瞭然である。

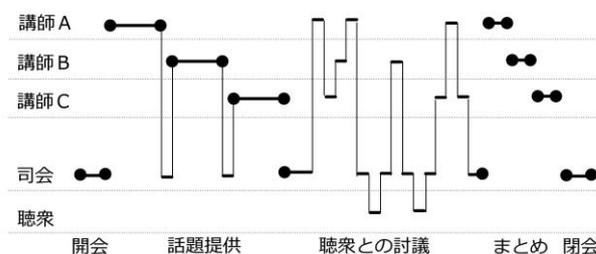


図2. シンポジウムの構成例

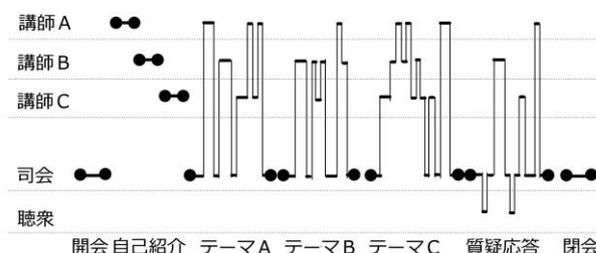


図3. 座談会形式の構成例

特に、座談会形式のイベントには司会の準備が重要になる。筆者はここ2年ほどで3回、座談会形式のトークイベントの司会を行った。本稿ではそのさいの構成と司会法が好評であったので紹介する。

*大阪市立科学館
e-mail:watanabe@sci-museum.jp

2. 複数話者によるトークイベントの3事例

前節で述べた通り、本稿では、2015 年春から 2016 年春にかけて筆者が関わった以下の3つの座談会形式トークイベントを取り上げる。なお、一般には「登壇者」であるが、本稿では「話者」と表記する。

A. 「サブカル×宇宙」論(図4)

日時:2015年3月19日(木) 19:00-22:00

話者:3人(科学者、SF作家2人)

参加者:31人

会場:King of Kings(大阪府大阪市北区)

主催:計算基礎科学連携拠点(代表:筑波大学)

備考:ネット中継あり(視聴者 1223人)

B. 宇宙図「人は宇宙になにを見るのか？」(図5)

日時:2015年9月9日(水) 18:00-21:00

話者:3人(科学者、美術家、コピーライター)

参加者:42人

会場:理化学研究所 計算科学研究機構
(兵庫県神戸市中央区)

主催:計算基礎科学連携拠点(代表:筑波大学)

備考:ネット中継あり(視聴者 2058人)

C. 2人の博士にきくー電気科学館&大阪帝大(図6)

日時:2016年3月13日(日) 18:00-21:00

話者:3人(科学者×3人)

参加者:80人

会場:大阪市立科学館

主催:大阪市立科学館

各イベント共通の特徴は、次の通りである。

1. 複数の話者がいる
2. シンポジウムではなく座談会形式である
3. 関連して、場そのものを楽しむことが主眼となる
4. 参加動機として、話者とテーマの拮抗が予想
5. 話者と参加者が近い

また、A、Bに共通する特徴は、次の通りである。

1. 外部の主催で、企画段階で相談にのっていたイベントの司会を依頼された
2. ニコニコ動画によるネット中継が入った。ニコニコ動画は視聴者がリアルタイムにコメントを返せるのが特徴である。

Cについては、話者は対等ではなく、一人がメインになるが、全体としては2人がメインで、もう1人がゲストと

いう設定であるのが違う点である。それぞれの会場の雰囲気は、図4~6の通りである。



図4. 「サブカル×宇宙」論の様子。右側のスクリーンには、ネット中継のコメントなどが表示された。



図5. 宇宙図「人は宇宙になにを見るのか？」の様子



図6. 2人の博士にきくーの様子

次に、各々のトークイベントについて、実施順に特徴点を少し掘り下げて述べる。最初に行った「サブカル×宇宙」論を土台にしてやり方を改良・拡張していつている。

2-1. A. 「サブカル×宇宙」論とその特徴

サブカルは傍流の文化のことで、アニメ、ゲーム、エンタメなどが範疇に入る。ここではサブカルとしてSFと本流学術の宇宙科学の関わりについてのトークを楽しむというのが目的となった。内容は次の通りである。

天文学や宇宙が文化や社会にどのような影響を与えているのか、特に 80 年代以降のアニメ、漫画、映画、SF 等サブカルに与えてきた影響を振り返りつつ、天文学の最前線の話題を踏まえ、これから先の時代にどんな宇宙文化が華開くかを議論する。

話者としては、SF作家(山本弘、野尻抱介)と天文学者(福江純)が登壇し、適宜、主催者(科学者が多くふくまれる)も参加することとなった。

形式は座談会方式であり、話者が自由に話すことになる。ここで問題になるのは、次の点であった。それが構成と司会で回避すべき課題である。

1. 話者が著作物で有名なことから、ファンとそれ以外で話者が何者かという知識のギャップが大きい
2. 話者同士が旧知であることから、話者同士がマニアックな内容を楽しみ、大多数はおいてけぼりになる
3. テーマに拘泥すると、堅すぎる形式張った話になり、楽しい場がつかれない

そこで、構成するにあたり、次を念頭に考えた。

- A. 最初に場として共有したい知識をまとめて伝える
- B. 参加者が仮に内容を十分に理解できなくても、楽しい場をつくる。
そのために、話者の親しみやすさを演出する。

以上より、次の様な流れを考えた。

2-1-1. A. 「サブカル×宇宙」論の構成

1. 趣旨説明(主催者)
2. 司会登場、客いじり、サブカルについてお話。
3. 話者自己紹介と、お気に入りグッズ・作品紹介
4. テーマトーク
作家の作品をネタに雑談
話者が気になる、サブカル×宇宙な話題
参加者が気になる、話題について
司会による雑談(休憩ふくむ)
最新天文学やガジェットについて
5. 総合ディスカッション・まとめ

上記1は、堅い話なので、2、3で場の雰囲気と会場のテーマと話者についての最低限の共通理解を作り、そのあとで、テーマトーク、総合ディスカッションと話を広げていく形にしている。テーマトークにしても、なかば自己紹介の延長のような話から入って、共通理解・情報を拡張していくという形式をとった。

これは、ゲームなどで最初にトレーニングモードから入って、そこで得た知識を使いながら、少しずつ高度な内容になっていくのと同じである。教育トレーニングのやり方をそのまま踏襲しているといってもよい。

2-1-2. A. 「サブカル×宇宙」論の司会の工夫

以上のような構成と同時に、どのように司会進行をするかを考えた。構成で重視した、共通理解を作るため「楽しい場」を作るにどうすればよいかを考えた。

工夫1. 話者にグッズを持ってきてもらう

まず、準備として、話者にグッズを持ってきてもらうことにした。モノは言葉とちがいで、その存在そのものから意味を発信できる。言葉でわからないものだと頭に入らないが、実物を見せるとその存在は必ずや頭に残ることになる。科学館のギャラリートークでも行うこの手法をここでも応用した。また、この経験は、別のイベント「天文学者大集合！」でも天文学者にモノを持ってきてもらって語ってもらうという形で活用した。

工夫2. 話者の取り上げるネタを事前に把握(前半)。作品なら読み込んでおく

また、事前準備として、テーマトーク前半のネタは、あらかじめ聞いておいて、作品ならそれをよみ込んでおくようにした。これは、内容を紹介するためではなく、参加者が疑問におもったりひっかかったりするポイントをある程度予見するためである。うっかり、話者の代わりにしゃべらないように注意することとした。

一方で、議論が盛り上がっているだろう後半については、取り上げるネタを特に決めずに、場のなかで話題になったものを掘り下げるように考えた。

工夫3. 参加者の目線で代弁しながら司会進行

実際の進行に入ってから注意したのは、参加者の目線である。参加者が疑問におもったり、ひっかかったり、つまらないと思うことは、参加者の表情を見ながら司会が積極的に代弁することを心がけた。ただ、この場合は会場がやや薄暗かったために表情を読むなどが難しい面があった。一方で、この会ではネット視聴者がその場でコメントを返してきており、それを拾いながら話者に問いかけたりすることができた。ネット視聴を併用する場合の一つの利点であるといえる。

工夫4. ともかく楽しそうにする

内容に常に興味をもち、楽しみながら進行することにした。そのさい、工夫3とも関わるが、自分がよくわからないことは、ほっておかず進行をとめてでも理解していくように心がけた。

それでも無理なら、楽しそうな演技をしようと考えていたが、これは不要であったし、演技はすぐにわかってしまうので、やるべきではなかったであろう。

工夫5. 参加者に積極的に参画してもらう

話者の疑問に答えられる参加者がいれば、積極的に参加してもらった。これはネット視聴者にもハプニング的な要素と見えて好評であった。

以上の工夫と構成をした結果、途中でテーマ設定に無理があって(話者があまり興味を持っていなかった)若干だれた時間があったものの、3時間に渡る座談会を楽しみ雰囲気の中のでやりきることができた。

当日のネット視聴者の評価は、5点満点中の5点(とてもよかった)と4点(よかった)しかないという極めて高評価となった。元々ファンがいる作家の視聴が多かったためのかさ上げはあったかと思うが、大成功のうちにこれを終えることができた。

2-2. B. 宇宙図「人は宇宙になにを見ているのか？」とその特徴

A. 「サブカル×宇宙」論で高評価だったためか、その半年後に同じ主催者から再び司会をやってほしいという依頼があった。内容は次の通りである。

今回のテーマは、宇宙と人間、です。宇宙物理学の最先端ではどのような研究が行われているのか、特に会場となるスーパーコンピューター「京」と絡んで計算科学の最前線についてお話しをうかがった後、科学、哲学、思想、文化、芸術など、幅広い分野の話題を自由に議論していきます。各分野の専門家であるゲストの皆さんが宇宙を通じてなにを見ているのかを知ることで、私たちが持ちうる世界観の可能性を考えてみたいと思います。

スーパーコンピューター「京」が設置された研究所でのイベントなのでそれにふれてほしいとあるが、あとはほぼ「何を話してもよい」という内容となっている。

話者は、天文学者・計算機科学者(牧野淳一郎)と、美術家(小阪淳)、コピーライター(片桐暁)である。小阪・片桐の両氏は主催者とともに文部科学省のポスター「宇宙図」を作っており、宇宙についてある程度知悉

しているのが特徴である。ただし、一般に広く知られている作品は共著の小説が一つであり、特別ファンがついているわけではない。

以上の前提により、構成は、話者よりもテーマ、特に計算機科学に依った形にするのが素直である。

しかし、前回の座談会で、話者の魅力を共有したほろがおもしろくなるということを感じていたのと、事前の打ち合わせで実際に話者の魅力も感じた。また、話者がどんなネタを持っているのかを知った方が参加者も参画しやすく、場が盛り上がりやすいということを感じていた。

そこで、基本構成は同じにしつつ、テーマトークの一つは「京」コンピュータについてときめ、あとは成り行きで進めようと考えた。その構成が次の通りである。

2-2-1. B. 宇宙図「人は宇宙になにを見ているのか？」の構成

0. 事前に参加者と雑談

1. 趣旨説明(主催者)

2. ゲストトーク 話者自己紹介と、仕事道具の紹介

3. テーマトーク

スーパーコンピューター「京」から見える宇宙
参加者がお題を出すトーク

4. まとめ

0は、今回は事前に「京」の見学会があり(図7)、早くくる参加者が多かったために行えたことである。ここで、休憩時間の間に参加者の興味のあることを、直接話を聞いてひろいあつめ、テーマトークや進行に活かすこととした。

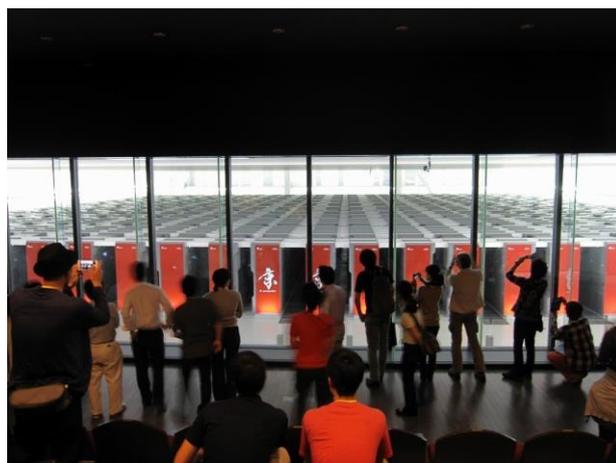


図7. 京コンピュータの見学。トークイベントと同一会場

話者自己紹介はゲストトークとし、話者の興味関心について長めに話していただくことにした。形式としては座談会よりもシンポジウムにやや近い形になる。ただし、ゲストトークは後半のテーマトークの内容に注目し

ない、あくまで話者について知ってもらうための時間であるので、シンポジウムではない。

2-2-2. B. 宇宙図「人は宇宙になにを見るのか？」の司会進行

司会進行の工夫は、おおむねA「サブカル×宇宙」論と同様である。違う点は次の通りである。

工夫2の改良. 話者の「持っている」ネタを事前に把握。作品を読み込む、舞台となった神戸との関わりなどの話も聞き込んでおく

話者と facebook やブログで話をし、話者のキャラクターや持っているネタを探っておくようにしたのが違う点である。また、誰でも参加できる「場所」ネタをしこんでおいたのが追加した工夫である。これは、話をつなぐときなどに有効であった。

工夫5の改良. 参加者に積極的に参画してもらう

構成の工夫で参加者と事前や休憩時間に話すタイミングをつくり、興味を持っていることや参加者のプロパティをリサーチしておいた。これにより、「恋愛と宇宙」という一風変わった切り口を自然と深めることができたほか、活発にコメントや質問が出るようになった。

以上の工夫と構成をした結果、自己紹介パートが予定の1.5倍になったという問題はあったものの、全体としてはイベントとして成功裏に行うことができた。ちなみにニコニコ生放送の視聴者数 1812 人、コメント 4825 件(1分あたり 25.5 件)。放送後アンケートの「とても良かった」58.5%「まあまあ良かった」であった。アンケートの成績は前回よりやや落ちたが、特定のファンがいない専門家のトークショーとしては成功だったといっていよいであろう。

2-3. C. 2人の博士にきくー電気科学館&大阪帝大とその特徴

3事例目は、自主企画のイベントである。ただし、最初に話者が工学者の住田健二氏と科学者の加藤賢一氏と決まっておき、そこに、追加ゲストで科学者の橋本幸士氏にも参画していただくという形になった。案内は下記の通りだが、大阪大学名誉教授で、大学の草創期について知り、また電気科学館の常連だった住田健二氏の話のうちがらが眼目である。

大阪は戦前から、大阪市立電気科学館(1937年開館)と、大阪帝国大学(1931年開学)という科学を楽しむ2大拠点を持っていました。この2大拠点について関わり

をもち、放送やプラネタリウムを通じて科学を楽しむ活動を展開した2人の博士に登壇いただき、科学を楽しむ街 大阪の魅力や未来について語っていただきます。

このイベントでは、昔の歴史的な話を聞くというのが中心となり、若い参加者がわかりにくいことが予想された。また、著名な科学者の話であっても、参加者にとって名前や業績がピンとこないこともあることも予想された。これは、話の内容の価値が十分に伝わらないからいがあるわけで、トークイベントでは致命的である。

そこで、この講演ではトーク全体の価値を最初に紹介するという方法をとった。

2-3-1. C. 2人の博士にきくー電気科学館&大阪帝大の構成

1. 趣旨説明(司会=主催者)
2. 電気科学館と大阪帝大についての基礎知識と科学館とのかかわりの紹介、ならびに話者紹介(司会)
3. テーマトーク
大阪帝大について
電気科学館について
4. 総合ディスカッション・まとめ

話者の自己紹介を大幅に省略したのが特徴であるが、トークの最中に、話者のうち住田氏の話も多く差し込むように別の話者の加藤氏にも依頼し、トークイベントのなかで何回も住田氏が登場するようにしておぎなった。

また、住田氏が膨大なレジュメを用意していただいたので、これを配布し、トークの内容についてイベントの直前に参加者に見てもらったのも特徴である。これは住田氏の発案で行った。

2-3-2. C. 2人の博士にきくー電気科学館&大阪帝大の司会進行

司会進行の工夫としては、これまでの2イベントと変わらない。ただ、モノを持ってくると仕込みは行わなかった。その代わりに、映像や画像を事前に多めに用意することとした。

工夫2の改良. 話者の「持っている」ネタを事前に把握。

あらかじめ住田氏の自宅にうかがってどんな話をしたいのかじっくりうかがった。そのなかで、積極的に話したそうな部分とそうでない部分についてのヒアリングをおこなった。また、他の話者についても著作物を一通り読み、その紹介もできるように準備した。

工夫3の改良．参加者の目線で代弁しながら司会進行、注目ポイントを積極的に紹介。

このイベントでは、先に述べたように名前や業績がピンとこない科学者などが紹介されることが予見されていた。そこで、そうした人が出てきたときには、他の話者や司会が紹介したり、聞き返したりしてイメージがわかりやすいようにかみ砕きながら進行することにした。

また工夫4. **ともかく楽しそうにする**とも関連して、これから話がおもしろくなりそうなところに、積極的に合いの手をいれるという進行を一部行ってみた。参加者を集中させるためのアクセントになるようにという意図であった。ただ、これはすぐに話に参加者が集中するようになったため、それほど積極的には行わないで済んだ。

以上の工夫を行いながら進行し、ゲストの機転にも助けられながら、イベントは好評のうちに終了することができた。終了後も、参加者がなかなか会場をさらずに、話者と懇談しようという様子(図8)が見て取れた。



図8. 楽しそうに質問、コメントする参加者

このイベントばかりは、一般講演会と同じく、話者の能力とテーマへの依存度が強くなったが、それに座談会形式の魅力をミックスさせることができたともいえる。

3. まとめ

以上、ここ1年間に3回おこなった、複数話者のトークイベントでの構成と司会方法の工夫について述べた。同様なイベントを連続して行うことで、前回の成功体験や反省をふまえ、改良しながら実施できたといえる。

司会進行については、事前の知識収集や、話者との打ち合わせなどの準備が功を奏した部分も多く、また、イベント当日も話者や参加者と積極的にかかわることで、トークイベントがよりおもしろくなることも確認できた。そのためには、構成に余裕をもたせるために、休憩時間などいれつつ、やや長めのプログラムにした方が良いでしょう。さらに、立って話すのではなく、座って話す形式のほうが、長丁場には向いているであろう。

さらにいえば、話者の荷物置き場になるが、立ち上がるのに障害にならないような小テーブルがあった方がよい。話者の名札にすることもできる。C では小テーブルが用意できなかったのも、話者の席にイスを多めに配置することにした。

ただ、このような座談会形式のトークイベントは、企画者や司会にとって一般の講演会にくらべ、相当に負担は大きい。講演会では引き出せない話者の魅力や話題が引き出せる。さらに、参加者のもつ情報も引き出すことができる。さらには、参加者がおもしろいと思えるような内容になりやすい要素も大きい。

つげくわえると、これらイベントを通じ、司会は新しい大量の知識や知見を得ることができる。

謝辞

最後に、トークイベントの主催、共催、話者、参加者、スポンサーのみなさまのおかげでこれらイベントが行えました。深く感謝いたします。また、イベントの写真の一部は東京大学の高梨氏が主催し、イベント A,B,の共催者であった「天文学とプラネタリウム」プロジェクトから提供いただきました。感謝いたします。

参考文献

計算基礎科学連携拠点 広報室, 会場参加者と視聴者が一体となって宇宙を考える－天文イベント@大阪開催報告, 2015年4月

https://www.jicfus.jp/field5/jp/150318-19tenpla_houkou/

計算基礎科学連携拠点 広報室, 宇宙は人を映す鏡－天文イベント@神戸開催報告, 2015年9月

https://www.jicfus.jp/field5/jp/150909tenpla_houkou/